

## ◎朝の表情

9 時に集合、10 分後には集合写真をとって解散、というお決まりのスタートで、今回のビバークも幕を開けた。桜島は前日から数カ月ぶりの噴火をし、海からの水蒸気と怪しい西からの雨雲に包まれ、ある種不気味な景色にもみえた。一方、子どもたちはワクワクのほう勝って、そんな桜島や空模様は気にもとまらない様子。にこやかに、少し緊張しながらも、保護者と分かれて森へ向かう。

## ◎寝床をつくる

二回目の今回は、春ということもあり、また天気も良好との予報だったため、「テントなしマッチなし」という条件で一夜を明かすこととした。前回のリピーターも半数はいることから、活動の約束はシンプルに 2 つだけ…「自分の身は自分で守る」「**Respect others** リスペクトアザーズ～他人を尊重すること」。オリエンテーションでは、夜までの見通し、グループ分けなどを行い、その後は子どもたちに任せた。結局着替えの問題などから、テントは必然的に男女別々をそれぞれが 1 棟ずつ建てることになり、女子は女子らしく、図面づくりからはじめ、材料調達を近くの竹林から行った。男子は、広場にあるテントの骨組みを参考に、5 角形の立体構造物を作ることにした。女子と違って設計図など作らず、頭の中で考えて、共有し、実作業に移るという手順。材料も、別のクラスが別の目的で取りためていた竹を活用するという。

圧巻は、男子テントだ。まず、5 角形を地面上につくる。その後、それぞれの返と長さの等しい竹を 2 本用意しきれいな星型を地面に描いた。ジョイント部分は、インパクトドライバーで穴をあけ、その穴にプラのバンドを通して 5 本一組でひとくりに固定。最後は五角形の部分を地面に残したまま、5 つの三角形の部分だけを壁として一気に立ち上げる。まさに 2×4 の建築工法？建造物が一瞬にして立ちあがった。この時点では全員が支えていないと壁は立ってはいられないが、上に横にと支えの柱をくくりつけ、見事、骨組みは自立してしまった。制作には材料調達からわずか 3 時間。空間把握力や手先の器用さ、何より 5 人の創造力が相まって、今日の前に大きな建造物が産み落とされた、という感動。

一方女子は、設計図どおりにつくっているようで、寸法がかなりアバウト。協同作業しているようで、5 人がまとまっていない。同じ方向をむいているようで、船頭がない。人間関係を象徴するように、どうくんでも骨組みがぎくしゃくし、あちらの壁をたちあげると、こちらの壁が倒れる。それでも男子からは意地でも教えを被らないという女子固有のプライドの高さというか頑固さというかで、5 時間、この作業を繰り返す。最後はロープをいろんなところの木へ括りつけてひっぱりあげる方法で、なんとか壁を立ち上げ、とりあえず達成感。

## ◎コンセンサスの大切さ

途中、ご飯の買い物へいかなければならない時間があり、そのメンバーを選出するための話し合いが全員で行われた。そもそも食事のメニューもいろいろな意見があり、前回の参加者は「暖かいものをみんなで作る方がいい（前回とても苦勞した）」というし、初めての参加者（リピーター）は、案の定「好きなものをそれぞれ食べれば？」とキリギリス的な発言を繰り返し、互いに歩み寄りが無い。更に、テントづくりに飽きてきた女子メンバーが、テントを体よく放り出して買い物に行けると察したのか、買い物係に挙手する子が殺到。この時点ではすでに男子のテントは出来上がっていて、どう考えても女子は男子に買い物をお願いしてテントを本気で建てた方が効率いいに決まっていた。経験者がどう未経験者を説得するか、年長者の発言力の強さを抑えながら、どう年下の意見を組み入れていくか、まさにコンセンサス実習しているような場面であった。客観的にみている男子は、その非効率さがよくわかる。直接自分たちとは関係ないが、テントのことなんてすっかり人任せに暴走している一部の女子を説得しようとする勇氣ある発言も見られた。しかし理不尽にもそんな建設的な意見すら耳を傾けない女子。ここでもプライドが許さない。ん～これが、性（さが）か。学校でもこんな感じなのかなあ。互いにいい部分や得意な部分を活かせれば、すごいことができるのに…こんなことを言うのも大抵男子だった。「男子はテントづくりが得意だし、女子は料理が得意でしょ？だからお互いに助け合ってやればいいじゃない？」。素晴らしい意見だ。無論、その重要性は女子のリピーターはよくわかっている。やはり経験とは、性差を超えて物をいうものだ。

スタッフが一言だけ介入。「このままでは、女子のテント、夜大変なことになるよ」。すると、この発言を援護射撃とリピーターや男子は逃さず、勢いをつけたたみかけていった。人手がいるテントには多くが残り、買い物は男子に任せるべきだ、と。一人だけリピーターを買い物に行かせ、経験を生かすべきだ、と。すると、最後まで買い物に行きたいとひかなかった女子がテント制作に回ると譲り、女子 1 名（リピーター）、男子 2 名（うち 1 名はリピーター）が買い出しに行くことになった。

## ◎小さな 2 つの火種

日頃焚き火を得意とする子どもたちも、火種から作るのは初めて。スタッフが用意した火起こしキットを使って、チャレンジする。弥生時代のご先祖が使っていたであろうと考えられている杉の木、麻、ロープを使って。焚き火経験のある 2 人が担当。しかし、弥生時代の道具など、初めて。道具の使い方のコツをつかむまで 2 時間。貴重な 2 つしかないキットのうち一つを破損してしまう。残り一つしかなくなって、何しろ休みなくチャレンジ。結構体力を使うものだから、係以外にも入れ替わり立ちかわりメンバーに協力をへて、4 時間。途中、太陽の力を利用して虫眼鏡で火種を作れないかなども、みんなで知恵を出し

合い、果敢にチャレンジ。天気が崩れてくるさなかで、日差しがでてくるタイミングも一瞬。また夕方になり陽も傾いてきており、陽が射すとひだまりに虫眼鏡と黒い紙をもって駆けつけるといふ力技も。その甲斐あってか、最後に小さな小さな火種が 2 回ともった。しかしそれも焦ってしまい、焚き火まで育てきれなかった。ようやくコツがわかった頃、最後のキットも摩擦で破損し、屈辱のギブアップ。森の中は雨の前で湿度が高かったこと、キットが湿気を含んでいて湿気を抜け切るまでに子どもたちの力ではとても難しかったことなどが原因。それでも火種が最後に作れたことは担当した子どもたちの自信に。次回のやる気・チャレンジにつながるまさに火種になった。

## ◎夜の怖さ、雨との戦い

毎回思うことだが、何もない不自由な環境だからこそ、人は頭を使ったり、協力しあうものなんだ、ということ。今回、予報に反しての悪天候。夕方からポツリポツリと雲行きが怪しくなり、夜のお楽しみの頃には雷が森中に鳴り響いた。ほとんどの人は体験がないと思うが、建物や身の寄せ場のない森の中、裸同然の状態、それも真っ暗闇…そこへとどろく雷の音の不気味さ、恐怖…。昔のご先祖たちも、こんなことを日々経験しながら、生きるか死ぬかを乗り越えてきたんだなあとつくづく思った。今回はテントもなければマッチもない。ある意味、ご先祖と同じように自然からの洗礼をうけ、朝日が昇るのをじっと待つわけで。住宅街に隣接する森とは思えない、サバイバルな危機感と臨場感。こんなこと、現代の都市部ではなかなか体験できない。

雨が、ブルーシートに叩きつけられるように降ってくる。たぶん、実際はそれほどでもない雨量。これがブルーシート一枚で真っ暗闇で感じる恐怖ったらない。地面には段ボールが敷いてあるだけ。場所によっては雨がしみこみ、じわりじわりと寝床を浸食してくる。風向きなど気にせず建ててしまったテント、雨を想定せずに適当に覆いかぶせたブルーシート。女子のテントが崩れるのは時間の問題だった。

その上、高い木々を大きくゆすり動かすほどの突風。遠くに近くに鳴り止まない雷。いつでも退避できるようにと、荷物を全部まとめ、雨具を着て就寝した。男子は雨風をしのげるだけのテントをつくっていて、9 時早々に全員が熟睡。一方の女子は、雨漏り、風の侵入と寝てる暇もなく、退避用に寝袋を 1 枚しかださずに、5 人で眠るというよくわからない方法を選び、2 時間近くを凍えながら固まって過ごす。テントの中では、「寝袋を出して寝よう」とか、それなりに改善策（意見）が出たらしいが、意見が全くまとまらなかった。

これは女子特有の雰囲気なのか…究極の環境に追い込まれても、未経験でも強い物言いの者が意見を通し、小さな正しい意見は抑圧され、発する勇気が持てぬまま埋もれていく。こういう場面こそ、年齢を超えて互いの経験をリスペクトし取り入れていくことが大切なのに…と、「今回もいい経験しているなあ（笑）」ほくそ笑むスタッフ。男子のテントからは 5 人のいびきが聞こえる。

夜中 12 時、女子はスタッフが用意していた別の雨よけの下に全員退避。その頃には雨もしっかり降っていて、寒さも堪えてきた。雨が当たらないその下に新たに段ボールをしいて寝床を作り直し、濡らさず大切に隠し持っていたそれぞれの寝袋を取りだして、一人ひとり寝袋に入る。15 分もしないうち、女子の寝袋からも寝息が聞こえてきた。これで一安心。朝まで女子も全員熟睡。その後、スタッフは別テントを作り、明け方まで焚き火を絶やさず雨の中過ごす。暗闇で覗いてみても、女子のテントは悲惨な状況、雨と風でボロボロ。その横を通って、イノシシがやってきたのは夜中 2 時頃だった。

## ◎＜経験＞することの大切さ

段ボールとブルーシートだけ。マッチもない…こんなことが、本当に今の子どもたちにできるのだろうか、と半信半疑で設定したビバークだったが、結果的には何とかあった。子どもたちの知恵にびっくりする場面もあったし、あ～あ…という場面もあった。それはまだまだ成長中の彼ら。少なくとも、一人ひとりの頑張りには拍手を送りたい。また、今回、性差を超えて一人ひとりの人間として相手を尊重すること、年齢如何に限らず経験に習うことの大切さをひしひしとを感じる場面があったはずだ。日頃、学校では男女のぶつかりあいばかりなのか、夕食までは男女（特に女子から男子への攻撃的な言動）、年上のものが年下を抑え込むという構図がみられた。それでもビバークは、命に関わること…リピーターは必死に自分の苦勞したことや失敗したことを活かそうと努力していたし、年齢が低くとも経験のあるものは、様々な人間関係の困難に屈してはいけないという信念みたいなものも感じた。そんな中、「みんなで協力するのっていいね」「仲間とうまくやりたい」という意見をぼつりぼつりと聞くことができたのが、一番の収穫かもしれない。大変な環境で経験したからこそ、心の底からでてきた実感のこもった一言。そして最後はやはり、「くやしい！またやりたい」。子どもたちの挑戦する気持ちは、途切れることはない。次回もまた秋に、この森で再会しよう。